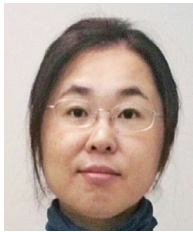


# 柔軟なワークライフバランスを



## 岩浦里愛

(独)農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所  
[305-8642]つくば市観音台2-1-12  
主任研究員, 博士(理学).  
専門は自己集合体化学, ナノバイオ材料.  
riwaura@affrc.go.jp

[www.naro.affrc.go.jp/nfri/](http://www.naro.affrc.go.jp/nfri/)

この春で、学位を取得してから11年経ち、一人娘は10歳になりました。筆者の仕事人としての研究キャリアは、ほとんど子育てと同時進行で積み重ねてきたこととなります。ワーキングマザーの先輩である筆者の母に妊娠のことを知らせたとき、母から「10年くらいは、仕事は2番目になると覚悟しなさいよ。10歳になったら、楽になるから。」と言われたことを思い出します。妊娠中は、ネットや妊婦向け雑誌でバラ色の産後生活を妄想していた筆者でしたが、出産後は自分の体調不良に加えて、育児本と全然違って予想がつかない赤ちゃんの挙動にストレスでいっぱいでした。仕事では、ある程度仮説を立てて、実験してみて、うまくいかなければ条件を変えたり、仮説を修正したり……という作業には慣れているわけですが、赤ちゃんに関しては、どうやったらいつも上機嫌でいてくれるのか、皆目わかりません。おまけに、夫は当時絵に描いたような日本の中堅サラリーマン生活でほとんどあてにできず、深刻なケンカも何度あったかしかれません。しかし、確かに10歳になってみると、生後三カ月から続けてきた送迎生活(保育所と放課後児童クラブ)は終わったし、自分の身の回りのことはほとんど自分でできるようになっているし、体は丈夫になり仕事は休みを取らなくてもよくなったし(ただし、小学校の行事はけっこう平日にあります……)、明らかに負担が軽くなりつつあるのを感じます(一方、夫はあまり変わっていません(笑))。ですので、もし今、小さいお子さんを抱えて仕事と育児に家事に奮闘している方がこれを読んでらしたら、遠くない将来、必ず楽になる日が来ると伝えたいと思います。

話は変わって、仕事と子育てに関連してこれまで一番印象深かったのは、娘が1歳半の頃ポストドク時代に訪問したオランダのアイントホーフェン工科大学での

ことでした。当時共同研究をしていた先生にも、まだ幼稚園生くらいの小さなお子さんが二人いらっしゃいました。奥様も仕事をおもちで、二人で分担して子育てされているとのこと。そのため、先生は週の勤務日数を3日にし、それも、遅くとも夕方6時には帰宅するという生活をされていました。なのに質・量ともにすばらしい研究成果を挙げておられることに、本当に驚くとともに、このような両立の仕方もあるんだ、というか、できるんだと、(能力の差は棚に上げて)ずいぶん勇気づけられたことを覚えています。傍目にはものすごく仕事人間なんだろうなあ……と見える人でも、やっぱり一日は連続した24時間で、仕事と私事はお互いに影響し合いながら成り立っているのだとしみじみ認識した経験でした。

さて、話はもとに戻って、娘に手がかからなくなってきた、まだ親の介護はないという現状、仕事と私事のバランスを変えて、少し仕事の質と量を上げる・増やす時期にさしかかっていると感じています。最近、読んでとても共感したのが、小柴恵美子さん(中小企業診断士)の『結局「女性活用」って何をすればいいの?』というネットの記事<sup>1)</sup>でした。「女性」とひとくくりにしても、人によって、時期によって、仕事に対するモチベーションや割ける時間が違うので、社会や会社はそれぞれに対応できるきめ細かな制度作りが必要だし、それは男性にとっても今後必要になるだろうとのことにご意見に、深く同意します。娘が今の私と同じ年齢になる頃、オランダで経験したような出来事が日本でも見られるのでしょうか? 未来はわかりませんが、母が私のロールモデルであったように、私も娘のロールモデルとなれるような人生を送りたいと願っています。

1) シェアーズカフェオンライン <http://sharescafe.net/38770445-20140511.html>